

江戸の町並展示と生活用具

江東区深川江戸資料館

1. 時代の流れと江戸の町並展示

深川江戸資料館には、長屋をはじめ、大店、船宿など江戸時代末期の深川の町並が再現展示されています。それら一軒一軒には細やかな設定がなされており、材質や工法、生活用具に至るまで、資料に基づいて出来る限り忠実に再現しています。そこには、今から170年前の江戸庶民の暮らしがあります。

江戸時代末期から現代に至るまでの約170年の間には、開国、明治維新、関東大震災、戦争、戦後の高度経済成長といった歴史の転換点があり、それらは人々のライフスタイルにも大きな影響を与えてきました。その結果、現在の暮らしからは姿を消してしまったり、使われなくなってしまったモノも少なくありません。そうしたモノ(展示資料)については、例えば、若い方からはどうやって使うのかといった質問、ご年配の方からは昔使った頃の思い出話など、様々な形で来館者の興味関心を集めていることがわかります。江戸時代の町並展示は、見る人により、その人の生きた時代、地域、知識を投影した、それぞれの見方があると言えます。

2. 来館者から注目される展示資料

展示室の中で解説をしていますと、決まってよく質問されるモノがあることに気がきます。また、年齢や性別などにより質問の内容や話題にも傾向があるように感じます。最近の来館者からは、いったいどのようなモノが注目されているのでしょうか。いくつかご紹介してみましよう。

(1) 折れ釘

土蔵の壁についている折れ曲がった釘(写真)は折れ釘と言います。多くの方から「あれは何ですか。」と訊かれます。土蔵そのものも人気がありますし、折れ釘は白い壁から突き出



土蔵の折れ釘

ているため良く目立ち来館者の注意をひくのでしょう。土蔵そのものはなんとなく知ってはいても、普段目にすることや中に入ることにはあまりありません。実際、精巧に復元された土蔵を目の前にしてみると、その独特な造りなどが改めて気になってくるのではないのでしょうか。

折れ釘は、土蔵のメンテナンスに必要な壁土・漆喰

といった材料などを入れた桶を綱で吊るしたり、足場の手掛かりにしたりなどに使われていたようですが、定説はありません。折れ釘のついていない土蔵もあります。おそらく地域や時代、あるいは土蔵の種類、造った職人によっても異なっていたと思われる。

(2) 枕屏風

長屋には写真のような衝立が置いてあり、たびたび「あの奥には何があるのですか。」と訊かれます。そこで、日中は押入れの代わりに布団を目隠しして、夜間は枕元に立て掛けて明かりや隙間風除けに使った



長屋の枕屏風

ことをお話しています。押入れは中が入っていないときにも場所をとります。枕屏風はその心配はなく、昼と夜の空間の使い方の違いに応じて便利に使い分けることで、限られた空間を有効に使うことができます。さらに全く使わないときには二つに折って畳んでしまうことも出来ます。また、お気に入りの絵などを貼って楽しんだりもしたようです。一つの用具を多目的で使う方法や、使わないときには畳んでしまえる用具は、日本人の生活の中に多くあります。例えば、布団や風呂敷・扇子などです。それらはライフスタイルの洋式化とともに少なくなりましたが、最近また見直されつつあります。

(3) 紙焙烙

船宿の長火鉢の上に置いてあります。「団扇でもないし、金魚掬いでもないし」と迷いつつ、「何に使うものでしょうか。」と質問される方が多くいらっしゃいます。



船宿の紙焙烙

焙烙の一つで、曲げ物の底に紙をかけ、遠火で茶などを焙るための用具です。焙烙は素焼きの土器が一般的です。紙焙烙は長火鉢の火で焙ります。フライパンなどの道具の登場により次第に使われなくなりました。

(4) 古〔小〕裂売り

写真の展示資料の前では「こんなところに洗濯物が干してある。」といった会話を耳にします。

正解は「古裂売り」です。古くなった着物の端切れな

どを担いで売って歩く物売りです。江戸時代は、壊れても出来る限り修理して使い、ゴミも燃料になるか埋め立てて土に戻る、環境に優しい循環型社会でした。古着屋、古裂売り



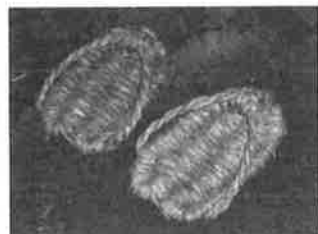
古裂売り

の他にも、古金屋や瀬戸物の破片をつなぐ焼き接ぎ屋、灰買い、ろうそくの流れ買い、くずもの拾いなどの商売がありました。現在では、エコロジー、リサイクルなどと言われるようになりましたが、江戸時代は、ごく当たり前のことでした。

展示室の町並を、エコロジーやリサイクルの視点から見てみるのも面白いと思います。

(5) 足半

しばしば、小さな草履を見た方から「この家には子供がいたのですね。」と話しかけられます。



船頭の足半

足半は、芯緒を利用して鼻緒を結んだ、踵部分のない短小の大人用の草履です。鼻緒が切れず、足に密着するため、泥などを跳ねることなく軽快に動け、水辺でも滑りにくいなどの利点があり、作業用として使われました。展示室では、水辺の職業である船頭と木場の木挽き職人の長屋に展示しています。

説明をした後には「ダイエットサンダルみたいですね。」という声も聞かれます。形態は類似していますが、用途は異なっている面白い事例です。

(6) お札

展示室の中には、神棚、戸口、台所など至る所にお札が貼ってあります。それらは、火難除け、盗難除け、疫病除けなどのためでした。

例えば、台所には、火難・盗難除けなどの災難除けとして、山住神社や釜伏山のお札があります。この他に、害獣除けのお札などもありましたが、江戸の町では、火難や盗難の方が需要が高かったと思われます。

疫病の中では、特



裏木戸のお札



長屋のサンダワラ

に疱瘡(天然痘)が恐れられていました。展示室にも、長屋裏木戸の湯尾峠(現福井県)のお札(写真)をはじめ、疱瘡守だけでも何種類かあります。長屋秀次の戸口に掛けてあるサンダワラ(俵の藁蓋)(写真)も、よく質問をされますが、疱瘡の習俗の一つです。ただ、今では、天然痘の恐ろしさも俵の蓋も知らない人が多くなっています。

(7) 展示室の人気者“実助”

展示室に入ると、まず長屋の屋根の猫がお出迎えます。実は、この猫にもモデルがあります。名前は実助。安政6年(1859)5月18日に死んで、深川の万徳院に葬られた黒斑、短尾の猫です。(平岩米吉著『新装版』猫の歴史と奇話より)

江戸時代、猫は、お経や蚕を鼠害から守るための動物でもありました。深川も寺町と呼ばれるほどお寺が多くありますが、中には猫を大切に飼っていたお寺もあったことでしょう。

3. 江戸の町並展示のこれから

江戸の町並の中では、建物や生活用具を見ながら思い出を語ったり、これは何々ねと、お互いに説明をしたり、会話を交わしながら見学をしている人も少なくありません。中には懐かしそうにしながら、そのモノにまつわる思い出を語ってくださる方もいらっしゃいます。展示の町並は江戸時代の深川ですので、厳密に言えば、その時代の暮らしを経験している人はいません。しかし、それ以降も、また他の地域でも、部分的には同じような生活が営まれていました。

資料館がオープンして20年以上の年月が過ぎました。その間にも、畳や障子のある伝統的な日本家屋が減少するなど、人々の生活は少しずつ変化しています。ここで紹介したようなモノも、目にするのは殆どなくなっていると言えます。そして展示室の中で交わされる会話や質問の内容も徐々に変化しつつあります。

最近では、敷居を抵抗なく踏むお客様は子供だけではありません。マンションの生活では、鴨居はもちろん、敷居、神棚、畳や障子のない暮らしが一般的になりました。江戸の町並や生活用具を見て、「懐かしい」と感じる世代の方々も減ってきています。これからは、さらに使ったこともない、見たこともないという方々が増えていくことでしょう。

また、伝統的な建築や藁細工などは、私たちの暮らしから消えていくと同時に、それらをつくる技術も途絶えつつあります。町並を維持していくことも一層難しくなることと思われます。そうした技術の継承についても考えていかなければならない問題です。

江戸の町並と生活用具の展示を通して何を学ぶことができるのか、何を伝えていくのか、今後も考えていきたいと思っています。